

## ダイバーシティ&インクルージョンセミナー 「男女共同参画の理想と現実とできること」

参加者からの質問に、須藤雄気先生が回答してくださいました。回答は須藤先生（男女共同参画学協会連絡会第20期副委員長）の個人的な見解です。学協会連絡会としての公式回答ではありません。

### 質問と回答

- Q. 女性では研究員から教員になるまでに大きな壁があるとのことですが、その「壁」の正体は何なのでしょう。その「壁」を減らすための施策は現在進められているのでしょうか？
- A. ライフイベント（結婚、出産、育児等）が最も大きな壁だと思います。ここで、研究者を止めてしまう例は非常に多いです。これに対応するため、連絡会では各種研究費等でのライフイベントの考慮を国に要望し、取り入れられているところです。
- Q. ライフイベントの考慮とありましたが、例えば諸外国ではそのようなライフイベントを考慮したキャリアや研究費の設計がなされているのでしょうか。（博士課程2年）
- A. （個人的な意見ですが）女性に対する出産の考慮はあると思いますが、それ以外はあまりないと思います。別の言い方をすると、男性もライフイベントに当然のように参画する諸外国（特に欧米）ではする必要がない、というのが実情かと思います。一方で、紹介しましたように、男性は仕事、女性は家庭という無意識のバイアスがある日本では、（残念ながら）積極的に考慮しなければならない、というのが現実かと思います。
- Q. どの様にして男女の給与格差が生じる事になっているか、理解して是正する必要があると思いました。分析や対策はされているのでしょうか。（准教授）
- A. ここにつきましては、今回の調査で特に差が顕著に表れています。連絡会でのディスカッションでは、役職手当や勤続年数の差によるものかもしれないと考えていますが、明確なエビデンスはありません。次回（第6回）大規模アンケートの設問で関連した設問を設置出来ないか考えたいと思います。
- Q. 男女の格差が思ったより大きくてショックを受けました。特に教授など年齢や地位が上の人だけでなく研究員でも年収の男女差があるというのに驚きました。この理由はなんなのでしょう。（助教）
- A. ここにつきましては、明確な理由はよくわかりません。連絡会でのディスカッションでは、役職手当や勤続年数の差によるものかもしれないと考えていますが、明確なエビデ

ンスはありません。次回（第6回）大規模アンケートの設問で関連した設問を設置出来ないか考えたいと思います。

- Q. 大学以前の学校教育（小中高）や家庭内の教育で、ジェンダーバイアスが植え付けられている気がします。そういったところに対して何か改善の取り組みはされているのでしょうか？ また、対応策としてはどういったことがあり得ますか？（助教）
- A. はい。こちらの影響も非常に大きいと考えています。連絡会では、女子中高生夏の学校（国立女性会館）や関西科学塾を立ち上げ、運営を行うことで、（少なくとも）高校生の段階でバイアスを取り除く活動をしています。
- Q. 東村先生のお話では名古屋大学では女性の科研費採択率のほうが男性よりも高い、というデータ紹介がありました。それでふと思ったのですが、科研費審査員のバイアスの有無については、何か調査があるのでしょうか。また、科研費以外の研究費採択の男女差についてはどうでしょうか？（教授）
- A. こちらは連絡会とは関係ありませんので、個人の意見になりますが、おそらくないと思います。一方で、科研費では、審査にあたり、男女や年齢、国籍などを考慮しないようことをはじめの誓約書（のようなもの）で書きますので、差別はないもの、というのが前提だと思えます。
- Q. 女性限定公募について質問です。確か昨年のセミナーで、大坪先生が女性限定公募をしても男性の採用が減っているわけではないというお話をされていました。ただ、その時に示されていたデータは数年前のものだったと思います。ここ数年で特に女性限定公募が増えているので、最新のデータを教えていただきたいです。結果として男性の採用が減っているということはないのでしょうか？（准教授）
- A. これについては答え方が難しいのですが、「減っていない」というのがオフィシャルな答えです。一方で、東北大の例では、凍結人事を女性公募なら動かして良い、ということで動いています。これも、普通の公募なら出来ないが、女性公募で動かせたということで、男性採用は減っていない、という言い方になります。諸外国では、アディショナルに女性枠を作って進めていることを考えるに、日本ではこの点が難しい問題となっています。
- Q. 「女性の支援が大事」というのが分かるが、「支援」の内容がよく分からないと毎回感じる。現行の支援では、子供の数がふえることはまず無いのではないか。「子育て支援」を考えるなら、「結婚の有無」「子供の数」で支援をすべきであろう。この上での「女性限定公募」なら、不満をもつ男性は少ないが、これは別な形の差別と言われかねないので難しいのかもしれない。この点に踏み込んだ講演をしてほしい。別に男女どうしでいがみ合っているのではなく、現行の女性優遇が表面や形式ばかりの施策で問題解決を志向していないので不満が出ているのだと思います。（准教授）

A. 子供のことを少し強調しすぎたかもしれません。すみません。あくまで副次的なものです（一方で、国の根幹に繋がるもっとも大事なものかもしれません）。まずは、日本の研究力向上が第一に重要なことです。それに向かって、女性もそうですし、若手研究者もそうですし、あるいはポスドクや技術員（特に長くつとめられているかた）もそうですが、全ての方のライフワークバランスがどのように良くなるべきかを、大規模アンケートを含めた他のアンケートを解析し、要望をまとめて文科省・内閣府等に提出しています（[https://www.djrenrakukai.org/proposal\\_request.html](https://www.djrenrakukai.org/proposal_request.html)）。

また、女性限定公募については、「逆差別、不平等」という声を聞きます。一面ではそういうところもあるかもしれませんが、ですが、1985年に日本が女子差別撤廃条約に批准しながら、40年弱たっても、未だにジェンダーギャップが146カ国中116位（2022年）にとどまっています。このような観点から、連絡会では大規模アンケートの解析結果に、あえて以下の文言を加えました（特に最後に全体のポジションの増加を加えました）。

\*\*\*\*\*  
この事実は、日本がとってきた“緩やかな”施策では不十分であり、（略）現場の意識を変え女性研究者の参画を促進する暫定的な「特別措置」の必要性を示す。（略）「女子差別撤廃条約」の第1部第4条の1には、「暫定的な特別措置をとることは、この条約に定義する差別と解してはならない。ただし、これらの措置は、機会および待遇の平等の目的が達成された時に廃止されなければならない。」と謳われている。すなわち、我々にとっての喫緊の課題は、研究者すべての層に「数値目標はその達成そのものが目的ではなく、多様性実現による科学技術イノベーションの活性化」が目的であること、同時に、「意識改革によるワークライフバランス達成のための特別措置でもある」と浸透させることである。また、女性の参画の推進は研究者人口の増加に繋がるため、ポジションの数が一定に留まっている状況では競争の激化をもたらす。（略）日本の科学技術イノベーションの推進を加速するためには女性の参画に見合う安定したポジションの増加が、より望ましい方向である。

\*\*\*\*\*

Q. さまざまな取り組みがされていることはわかりますが、それでも今現在困っている人（特に思うような職につけない若手、雇い止めにあった人、子育てや色々な理由でキャリアが中断してしまった人）の助けとしては全然足りないと思います。大学なら執行部、さらに政府がもっと効果的な対策を早急にしないと、研究したい人が研究できないという危機感を感じます。これに対して、一教員としては、何ができるでしょうか？ 何をしたらいいのでしょうか？（講師）

A. お気持ちありがとうございます。まずはそのような気持ちを持って頂くだけでも助けになります。その上で、同僚や先輩・後輩にお伝え頂き、一人でもそのような気持ちを持って頂ける方を増やすしかないかなと思います（個人的な意見）。そのような観点から、

私は学会やシンポジウム、大学のフォーラムなどで一人でも味方を増やすように努力しているつもりです。今回のアンケートの英語版も公開されましたので ([https://www.djrenrakukai.org/doc\\_pdf/2022/5th\\_enq/5th\\_Survey\\_en\\_all.pdf](https://www.djrenrakukai.org/doc_pdf/2022/5th_enq/5th_Survey_en_all.pdf))、これを活用して、諸外国から声をあげて頂くことも大事かもしれません。

- Q. 気づかぬうちにジェンダーについてバイアスを掛けてしまっている人たちが、意識を変えろというのはすごく難しいことだと思うのですが、いち個人でもできることにはどんな事があるのでしょうか？（修士課程2年）
- A. お気持ちありがとうございます。まずはそのような気持ちを持って頂くだけでも助けになります。その上で、同僚や先輩・後輩にお伝え頂き、一人でもそのような気持ちを持って頂ける方を増やすしかないかなと思います（個人的な意見）。
- Q. 男女共同参画の大切さを実感した体験や経験等ありましたら教えていただきたいです。（修士課程1年）
- A. （個人的な意見ですが）ひな壇に男性ばかりの内閣や、男ばかりの教授会をみるにつけ、単純に「気持ちが悪い」という感覚を持ったのが、男女共同参画の大事さを実感したはじまりです。
- Q. 東村先生のクイズに関しては、答えは一つではなく、男性同士の同性婚やステップファザーの可能性もあるのかなと思いました。セミナーの主旨から答えは想像できましたが、父親が一人という決めつけもアンコンシャス・バイアスの一つではないでしょうか。（助教）
- A. とても大事な指摘ですね。可能性は沢山あります。ご指摘の気づきの一つ一つがバイアスを取り除く原動力になりますね。

\* 質問者のお名前は省略しました。

\* 職業や学年は、記載があったもののみ掲載しています。

\* 文意の変わらない範囲で質問文を書き替えたところがあります。